



新潟県長岡市寺泊支所 地域振興・市民生活課

〒940-2592

新潟県長岡市寺泊烏帽子平1977-8

☎(0258)75-3111 FAX(0258)75-2238

E-mail tr-chiiki@city.nagaoka.lg.jp



長岡市
ホームページ

●宿泊予約等 お問い合わせは…

寺泊観光協会

〒940-2502 新潟県長岡市寺泊大町9353-527

☎(0258)75-3363 FAX(0258)75-5126

E-mail tera@niigata-inet.or.jp

〈営業時間〉AM8:30～PM5:00



寺泊観光協会
ホームページ

詩情豊かな

寺泊の史跡

風と潮がはこんだ 文化の地「寺泊」

寺泊が日本の歴史の上に初めて登場するのは「弘仁十三年（八二二）国分寺の尼法光が、往來の旅人難儀を救うため、古志郡渡戸浜（現在の寺泊付近）に布施屋（無料宿泊所）を設け、渡船二隻を置いて墾田四十町歩をその経費にあてた」という「袖中抄」の記録であります。国分寺は和銅二年（七〇九）開基の国上寺であろうとの説もありますが、寺泊には同時代草創の寺院が幾つかあることから、この地の開発は随分古いとされています。

寺泊の地名もここに由来し、渡戸から「泊」「寺尾泊」となり、鎌倉時代の頃から寺泊となったと言われています。また、昔は先住民族のエゾが住んでおり、アイヌ語でテイヤは海草、トマリは港という意味から、「テラドマリ」になったとの説もあります。

歴史の上でのこの町が有名なのは、順徳上皇をはじめ、日蓮聖人、日野資朝、藤原為兼や金山送りの大勢の無宿人たちが、悲憤慷慨し、不運をかこちながらここから佐渡へ渡っていることです。

江戸時代の寺泊は、江戸や大阪、四国を出帆し、能登半島を廻って、北海道へ交易した北前船の寄港地であり、海上交通の要津として栄えました。「万覚帳」や「町御用留」の記録によると、越後米の移出港として日に千俵の米が積出され、また北国街道の宿場町としても千客万来活気に溢れていました。

一方、精神文化もここに起こり、白鳳期の存在が検証された横滝山の古い寺院や、奈良時代初期草創と伝えられる幾つかの寺との関わりもあり、寺泊は名の示すように由緒ある多くの寺が建ち、人々は信仰心も篤く、人情豊かな町として今に至っています。日本海の鎌倉といわれる寺泊には、古い歴史と美しい自然と多くの寺院があります。そして、ここを訪れる人々に、山は四季折々にその表情を変え、海は昔のままに流人の哀史をささやきながら夏は鎌倉に匹敵する海水浴客を集め、寺や社は旅情を包んで、安らぎの境地に浸らせてくれるのです。

寺泊の 史跡めぐり MAP



日本海

直江津～
小木航路

赤泊

佐渡ヶ島

両津

両津～新潟航路

郷本海水浴場

郷本空庵跡

大和田

金山海水浴場

金山

寺泊水族
博物館

寺泊港

観光案内所

中央海水浴場

魚の市場通り

佐藤継信・忠信
追福の塔(円福寺)

寺泊民俗資料館

トキミ～て
トキと自然の学習館

夏戸
寺泊温泉

年友

汐見台

GS

長岡市寺泊支所

吉

寺泊つわぶき
温泉

寺泊文化センター

野積橋

寺泊岬温泉

荒谷

八百比丘尼の松

寺泊野積海岸温泉

野積海水浴場

立岩

越後七浦
シーサイドライン

至新潟

10 本間精一郎
誕生の地

11 日蓮上人
硯水の霊井

6 白山媛神社

7 二面神社

8 船絵馬

9 密蔵院

GS

竹森

GS

大森子陽墓

12 初君の
歌碑

渡部

渡部橋

国上寺

五合庵

国上山

弥彦山スカイライン

弥彦山

やひこ

弥彦神社

至燕

JR 弥彦線

至柏崎

至柏崎

碓田

GS

横滝山廃寺跡

寺泊コミュニティセンター

歓迎塔

敦ヶ曾根

大河津橋

ぶんすい

至長岡

良寛史料館

至新潟

JR 越後線

116

てらどまり

大河津分水路

道

道の駅国上

至新潟

史跡散策コース(徒歩)案内

所要時間 約60分

寺泊は史跡が多くあります。ここでは、歩いて訪れることができる身近なコースをご案内いたします。

下の地図の番号順に歩いて下さい。史跡説明も順番になっています。車でおいでの方は、聚感園前に駐車場がありますのでご利用下さい。



1 聚感園

ここは、北越地方の豪族五十嵐氏の邸宅跡です。

五十嵐氏は、大同元年（八〇六）先祖忠利が姓を賜り常陸守に任ぜられ、三代左衛門尉尉利忠の時、越後守として当国へ赴任せられたといわれます。寺泊へ移住した年代は不詳ですが、文治三年（一一八七）の頃は寺泊近在六十七ヶ町村を知行し、元和元年（六一五）から三十五年間、近郷一二六ヶ町村を支配していたという界限きつての権力者でありました。

しかし、江戸末期には家運が傾き、戊辰戦争による家財没収や明治初期の火災のために没落し、広大な屋敷も一部人手に渡る窮状に至りました。その後、心ある人々によって、この地の保存が叫ばれ、土地も買い戻されて、現在は史跡公園として市が管理に当たっています。

ここには、承久三年（一一二一）佐渡へ遷御された順徳上皇が、風待ちのためしばらくご滞留になられた際の行在所跡があります。

また、文治三年（一一八七）源義経主従が都落ちして寺泊に漂着し、ここ五十嵐邸にしばらく逗留したと伝えられ、今もその遺跡が残っています。

また、興国二年（一三四二）後醍醐天皇の第五皇子宗良親王が寺泊へ来て、新田義宗や土地の豪族五十嵐氏らと、南朝の起死回生策を謀議したと史実は伝えています。親王の詠歌を集めた『季花集』に「興国二年春、越後国寺泊に住みはべりしに帰雁を聞きていふる」と聞きし越後の空をだになほ浦遠く帰る雁が音と、他に千鳥を詠んだ一首があります。永仁六年（一二九八）には、歌人藤原兼為が佐渡配流の際一ヶ月余滞任し、遊女初君と歌を語り、今も池に名残りを留めるこの庭園を築いたといわれています。聚感園の名称は、「ここを訪れる人々が往時を偲びながら抱くであろうもろもろの感慨を聚める庭園」という意で、江戸時代の公卿・中院通知が、命名したものです。

所 在…長岡市寺泊大町
アクセス…大町バス停より徒歩2分



2 順徳上皇 行宮御遺蹟碑

順徳上皇
あんぐうごいせきひ

所 在…史跡公園 聚感園内
アクセス…大町バス停より徒歩2分

承久の乱の後、佐渡へ遷流になった順徳上皇を偲び、県会議員を務めた本間健四郎ら町の有志の篤志によって、大正十一年に建設されました。

この巨大な碑面には、漢文で長い文章が刻まれており、要訳すると次のようになります。

「嗚呼 承久の事またこれをいうに忍びない、三上皇は海島に遷され（後鳥羽上皇は隠岐、土御門上皇は四国、順徳上皇は佐渡）侍臣は少く記載は伝わらず…帝此の地に御着の頃はたまたま晩秋、風濤險悪、よって行宮を造りご滞留が数月間、翌春に至り佐渡に幸せられるという…行宮の跡、幸いに存し、以って今日に至り、海を隔てて真野の山稜と相對し、帝の御たましいが此所に留まり給うのではなからうか、敬慕、哀痛のきわみである。草の茂りにまかせ、湮滅させることがあつてはならない…」

これは明治四十年、日本最初の文学博士重野安繹による漢文です。掲額には有栖川宮威仁親王より賜り、書は「明治の三筆」として名高い日下部鳴鶴によるものです。陸前石の巨石に刻した後、はるばる東京秋葉原駅より貨車で信越線經由直江津駅へ送り、そこから船で寺泊港に運びました。設計は工学博士で建築史家の伊東忠太の手によるものです。

石碑の瑞石垣は、下の台座から上の手すりまで、御影石一本をくり抜いた石でできており、いちだんと碑の尊厳をなしています。

順徳上皇が京都から寺泊まで、幾山河の難路をどのように越えてお着きになったかは、文献には何も伝えられていません。五十嵐家では「武兵衛屋敷のうち平なる所に行宮をしつらえ申し候」として、邸内に菊の紋章の幕を張りめぐらし、都菊を植えて、手厚くおもてなしをしたと伝えられています。上皇はしばらくここに滞在の後、断腸の思いで佐渡へ渡られました。時に御年二十五歳でした。



所 在…史跡公園 聚感園内
アクセス…大町バス停より徒歩2分

源義経は、兄頼朝の命を受けて一の谷、屋島、壇の浦の合戦で平家を滅ぼし、大きな戦功を立てました。しかし、逆に兄頼朝に疎まれ、追手をかけられて、弁慶以下わずかの手兵を従えて都落ちし、奥州平泉の藤原秀衡を頼って、身の危険にさらされながら、北陸路を奥州へ奥州へと逃げて下って行く様子が『義経記』にも伝えられています。

その道中、義経一行は海上で遭難し寺泊へ漂着、疲労しきっていたので土地の豪族五十嵐氏邸へ身をよせ、幾日間か逗留したと伝えられています。五十嵐氏は人々の目を避けるために、後庭にあった浴室にかくまい、従者の弁慶が義経の手洗いや洗顔の用にとわざわざその裏に井戸を掘ったと伝えられています。

江戸時代の天保年間に漢学者の亀田鵬齋がこの五十嵐家を訪れたとき「弁慶井泉の詩」をつくられました。

弁慶 井 銘

泌沸寒泉 泌沸たる寒泉
斂斯為井 斯に斂って井となる
其味甘美 其の味甘美に
其氣清冷 其の氣清冷なり
可以釀酒 以って酒を醸すべく
可以煮茗 以って茗を煮るべし
大旱不涸 大旱にも涸れず
巨浸不充 巨浸にも充たず

歴記六百 祀を歴ること六百
源々無窮 源々窮り無し
誰其鑿之 誰か其れ之をうがつ
法師慶公 法師弁慶にぞある

泌沸＝水がわき出る様
巨浸＝大雨



順徳上皇御霊地

越之浦神社

所 在…史跡公園 聚感園内
アクセス…聚感園入口から徒歩6分

ここは、順徳上皇の御神霊を奉祀する神社です。仁治三年（一二四二）九月十二日、上皇崩御の悲報を聞いた五十嵐家の当主武兵衛は、旧行在所の脇に上皇が葬られた佐渡の真野御陵と相對う形で、小さな祠を建てました。その後、諸行無常、盛者必衰の理のままに五十嵐家が没落した時、膨湃と御遺蹟保存の声が揚がり、有志の浄財で聚感園として整備されました。そして、大正十一年には、「御遺蹟碑」と「御製碑」が園内に建立されました。しかし、上皇をお祀りする神社の建設は、神殿・拜殿の設計書はできたものの世柄が悪く、昭和十五年ようやく神殿のみが建ち、越之浦神社と命名されたのです。この時、園内の下にあった「御製碑」を神殿の脇に移転しましたが、碑には三首の歌が刻まれています。

たのめすはつらきならひと思はまし

なかなかなりや松に風吹く風

露も袖にいたくなぬれそ秋の夜の

ながき思ひは月に見るとも

月見ても秋のあはれはあるものを

しづ心なくうつころもかな

越之浦神社と地続きに法福寺という寺があります。ここに良寛と二つちがいの妹「むら」の墓があります。むらは出雲崎の橘屋から寺泊の庄屋外山文左衛門に嫁ぎ、良寛が寺泊や国上に住んでいた頃、衣食の世話など兄の面倒をよくみたと伝えられています。

托鉢に出ては「味噌少々着たりたく候」と一筆書き置いたり、「野積の海苔を少し賜われ」と歌の置手紙をしたり、洗濯物あまり強く打つと器物が弱るなどの口上書を届けたり、親しい兄妹の関係がよくわかります。良寛が長く寺泊近辺に住んだのも、妹むらのやさしい心遣いがあればこそなのです。

むらは兄良寛に先立って、文政七年（一二二四）六十四歳で亡くなりましたが、その墓前には良寛思慕の人のちの参詣が後を絶ちません。



五十嵐伊織の墓

所 在…史跡公園 聚感園内
アクセス…聚感園入口から徒歩5分

南蒲原郡田上村（現田上町）田巻三郎兵衛の三男に生まれ、長じて寺泊の五十嵐家を継いだ人です。幼くして、藍沢・南城について学び、皇典を修め、また、長岡藩士篠原某を聘して剣道に精進したといわれます。性剛直で敬神尊王の念に篤く、戊辰の役では、寺泊の窪沢、一、脇屋志喜武、外山友之輔、柳下安太郎等と五人で勤皇を志し、三月二十四日奮然として郷里を出ました。松の山より直江津に出て、同志数十人と合流し、糸魚川を経て信州松本に至り、中仙道を通って上洛をはかりました。たまたま美濃国（岐阜県）十三嶺で奥羽鎮撫副総督三位沢為量の家令、近藤泉等に会い、一隊は西京に入り、伊織は一隊をひきいて会津（福島県）へ向かいました。仙台へ到着してから沢副総督に謁見し、荘内（山形県）征討を命ぜられ、各地に転戦、奥羽の乱を平定して京都に凱旋しました。

翌明治二年に至り、京都に滞在中、大村益次郎暗殺の党に加わり、同年十二月二十九日に斬首の刑に処せられました。時に享年二十九歳、故郷寺泊の妻と二児を案じながらの最期でした。

さて、伊織はなぜこのような大事件を起こしたのでしょうか。当時は、明治の新政がわずかに緒に上ったばかりで、新旧思想の衝突混乱は、今日推定する以上のことであつたと思います。暗殺に加つた同志たちは、熱狂的な国粹論者であり、強烈な攘夷論者でした。大村益次郎が意図するフランス式兵法では、せつかく神威を輝かした皇道が衰退し、人心が浮薄になりついに救いようのない事態に、というのが彼等の心配であつたのです。

伊織は今、古里の海を見下ろすゆかりの台地に、波乱万丈の生涯をわが家の栄枯盛衰になぞらえながら、寂滅為楽の眠りについています。



白山媛神社

所 在…長岡市寺泊大町
アクセス…大町バス停より徒歩7分

聚感園から、群生する石路や藪椿を見やりながら高台に出ると、急に視野が開け、旅館の建つ街並や港が一望のうちに見渡され、夢の島佐渡も手に取るように眺められます。この台地に建つのが、寺泊の総鎮守白山媛神社であります。花崗岩の大鳥居から一二五段の石段上、海拔三〇メートルの所に位置します。氏子たちは、この神社を「はくさんさま」とか「おおみやさま」と呼んでいます。寺泊の鎮守さまとして古来町の人々に親しまれ、尊崇されてきました。町の人たちは、はくさんひめ神社と呼んでいます。正しくは、しらやまひめ神社、といひます。

昔は神仏混淆の形で「白山大権現」ともいい、別当は代々胎藏院の山伏でした。これは加賀の白山信仰に基づくものと思われまふ。ご祭神は伊弉册尊と菊理媛命で国家安泰と海上安全、地方開発の神として崇められてきました。神域には社殿をはじめ、住吉神社、二面神社等の末社が並び、船給馬取蔵庫、忠魂碑が建っています。

白山媛神社の創建年代は不詳ですが、延長五年（九二七）の「延喜式内神名帳」には神社名が見えないため、この時代には存在しなかったと思われる。神域内の二面神社は、明徳二年（一三九一）創建との言い伝えがあります。すから、この年以前には鎮守さまとしての社殿があつたのかも知れません。今の社殿は明和八年（一七七二）に再建されたものです。

神社の祭礼は五月三日、四日と九月十五日です。秋祭りは神事のみが静かにとり行われていますが、春の大祭は神輿の渡御があり、十万石の格式という大名行列が海岸の町内を練り歩きます。昔は「いわし祭り」とも言つて、浜は鯛の大漁で活気づき、街はむせかえるような雑踏であつたといわれます。が、伝説は今も受け継がれて大賑わいを呈しています。



二面神社

所 在…長岡市寺泊大町

白山媛神社境内

アクセス…大町バス停より徒歩7分

二面神社は、明徳二年（一三九一）五月、土地の漁師平三郎が夢枕に立った神様のお告げにより、海上に漂流する御神体を取り揚げて、ここに祀ったといわれています。ご神体は、横三九センチ、縦八二センチの板に、網を持って魚を獲る西洋人と思われる人物像を透かし彫りにしたもので、奇異を感じると一舁男女の像であります。

専門家の調査によると、木質は不詳ですが西洋、特にスペインなどの国の船首像、つまり海上安全と大漁満足を祈念して、船首につけた船神様のようなものであるといわれます。また、船室の欄間に似た飾り窓でなかるうかともいわれます。

いづれにしても、コロンブスのアメリカ大陸発見（一四九二）、バスコダガマのインド航路発見（一四九八）、マゼランの太平洋発見（一五一九）以前に、この二面像がどこから、どんな経路で日本の佐渡海峡にまで漂流したのかは、今も謎とされています。

この神社の祭礼は、三月と九月の二回行われますが、春は女神の像を正面に、秋の祭典の時には反対に男神の像を正面に向ける慣わしになっています。

これは、季節々々の天候に関連するものと思われれます。またこの日、神呪によるお伺い（占い）が行われ、その年の鯛、鯛、いか、鯖、鱈の漁況や、各月の海の荒れる時化日をうかがったといわれます。祭礼には、漁師衆が大勢参詣し、神楽舞を奉納したり、神酒を酌み交わしたりして、昔は白山媛神社大祭に次ぐ賑わいであったと、古老の漁師は語り伝えていきます。

ご神体が難破した外国船の船首像であるにしても、豊漁と安全を祈願する漁師衆の古くからの習俗を通して、謎を秘めた海のロマンを感じる二面神社です。



船絵馬

所 在…長岡市寺泊大町

船絵馬収蔵庫

アクセス…大町バス停より徒歩7分

日本海を航行する北前船にとって、寺泊は大切な港であり、高台に鎮座する白山媛神社は、航海に生きる人々の守護神として、篤い信仰を集めてきました。

ここに収蔵されている船絵馬は、白山媛神社に奉納され、拝殿に掲げられてきた五十種、五十二枚に及ぶ北前船の絵馬で、そのほとんど全部に船名と奉納者名が記入されています。

奉納された期間は、安永三年（一七七四）から明治二十二年（一八八九）に及んでいますが、これは北前船が活動していたほぼ全期間に相当します。

絵馬は元来、船主や船頭が航海の安全を祈願して、自分の持ち船を絵馬師に注文して描かせたもので、時代によって変化が見られます。また船の構造、帆印、帆の反数、乗組員などがていねいに描かれ、奉納の時期、奉納者がしるされています。船の帆の最大ものは二十五反で、いわゆる千石船に相当するものもあります。

船絵馬の絵で多くみられるのが、船のほかに社殿四棟と円形の弧をえがく大鼓橋や船見灯籠です。これらは海の守護神といわれる住吉神社をあらわしたものです。

白山媛神社に奉納されているこの船絵馬は、時代、数量や内容からみて、北前船造船史及び航海史研究などの貴重な民俗資料として、昭和四十五年に国の重要民俗文化財に指定されています。

船絵馬は、全国各地の港でみることができますが、寺泊にはこのほか、円福寺の妙見堂に奉納された船絵馬三点があり、特に金子金運丸御利益の遭難図は、珍品とされています。破損や盗難から守るため、収蔵庫を建設し、保存につとめているため、一般公開はされていませんが、白山媛神社社務所にお問い合わせいただけます。



密蔵院

所 在…長岡市寺泊片町

照明寺境内

アクセス…佐渡汽船入口バス停より徒歩7分

「ここは照明寺という真言宗の寺で、寺泊では屈指の大寺である。旧道から切通しになっていく坂を入れてゆくと左手に照明寺の登り口がある。良寛は生涯のうち三度ほどここに移り住んだとつたえられる（中略）密蔵院はその境内の高台にある」（水上勉著「良寛を歩く」より）

諸国放浪を終えた良寛が、飄然と越後に帰った最初の宿は郷本の空庵でしたが、半年ぐらいでやがて行方を絶つてしまいました。そして再び寺泊に帰ってきて、仮住いしたのがこの密蔵院です。天保十二年（一八四一）に照明寺火災のときに類焼し、昭和三十三年に現在の建物に復元されました。

密蔵院は、平屋建ての小さな庵でいかにも簡素至極な風情をたたえて、眼下に海を望む高台にひっそりとした佇まいをみせています。茶室風の部屋とゆかりの軸物などがあり、良寛はここに住んで托鉢に出たり、掃除をしたりして悠々自適の生活をおくっていたようです。そして、ここが気に入ったとみえて、多くの詩歌をのこされています。

おほとこの はやしのもとをきよめつつ

きのふも けふも くらしつるかも

これは、境内の歌碑に彫られており、良寛がこよなくここを愛して「大殿の森の下庵夜あくれば 鴉鳴くなり朝清めせむ」とも詠んで、いつも庭をはききよめて日々を送っていた様子がしのばれます。

良寛の寺泊での逸話は多く知られていますが、なかでも良寛が托鉢の最中、遊女に呼びとめられて、おはじき遊びに興じたり、お金を借りていた男から借金の催促をされ、良寛はしかたなしにちびた筆で歌を書いて借金を帳消しにしてもらったなど、人間良寛の寺泊での暮しぶりがほのぼのと伝わってくるようです。

勤王の志士

本間精一郎誕生の地

所 在…長岡市寺泊片町

アクセス…佐渡汽船入口バス停・

大町バス停より徒歩3分

本間精一郎の実家は、酢、醤油の醸造を営む「かくほん」という屋号の豪商で、本家「やまほん」の分家でした。先祖は佐渡守護職本間遠江守正方で、承応二年（一六五三）遠江守の孫の代に寺泊に移り、廻船吟味役をしていた清左衛門から分家しました。父は五代目辻右衛門で、精一郎はその長男でした。

嘉永六年（一八五三）六月、米大使ペルーが四隻の軍艦を従えて浦賀に投錨し、日本中が大混乱のとき、精一郎は青雲の志を抱いて「曇なき真澄の月の心もてあわれ雲井に名を照さばや」の一首を壁に書き残して郷里をあとにしました。時に精一郎二十歳でした。

燃え盛る大志を胸に秘めて翔んだ精一郎が、志士としておどり出たのは、幕末の文字通りの騒乱期でした。精一郎は安政五年（一八五八）まで江戸におり、幕府の要人川路聖謨につかえました。しかし勘定奉行川路聖謨の中小姓から転じて、勤王の志士として京都に潜り、いつしか尊攘派浪士の中心的存在となっていました。

この頃の日本はもめにもめ、開国か鎖国か、朝廷か幕府か、京都はその中心舞台でした。

精一郎の主眼は王政復古であり、倒幕であったため、威圧による外国の不遜な貿易の交渉などは、あくまで反対で攘夷すべしと主張し、さらに公武合体には不満の意を表明しました。やがて幕府と朝廷、薩摩、長州、土佐の三藩の勢力争いの渦中において、浪士であるがゆえに、それぞれの立場を優先する側からは疎まれたのです。そして喬木は風に逆らうのたとえで、間もなく同志等の誤解を招き、京都木屋町で土佐藩士武市半平、太の謀計により、岡田以蔵等の兇刃に斃れたのです。時に文久二年（一八六二）精一郎二十九歳、初秋の夜のできごとでした。



今から七百余年ほど昔、文永八年（一一七一）日蓮上人が佐渡へ配流になったとき、寺泊で船を待ちつつ説法された「北国最初の霊地」です。
ここに七日間滞在されたとき、下総国（千葉県）中山の弟子日常宛に有名な「寺泊御書」を書きました。そのとき用いられた硯水はこの霊井で、今も真夏にも涸れず、冷たく澄みきった水がこんなと湧き出ています。

相師堂門前の碑文はこの寺泊御書を写したもので、原本は現在千葉県中山の法華経寺にあります。それを訳しますと「今月（十月）十日相州をたつて武蔵の国久目の河宿につく。それから十二日を経て越後国寺泊港に着いた。ここより大海を渡つて佐渡国にゆこうと思うが、風波が荒れて何時になったら順風定まるか見込みがつかない。法華経をひろめるには必ず迫害を伴ない、難にあうことはあきらかであるが、今さらなげくべきでないと思つて自分はなげかない。（中略）日蓮は八十万億というたくさんの菩薩の代りとなつて、この経が末法の世にひろまるということなのである。自分の背後には菩薩のお力添えが加わつている。（中略）ただし、牢屋にいる弟子日朗や他の僧のことなど心配になる。（日朗たちは、やはり法難にあつて鎌倉の牢にいた）何時か便りのある時にその消息を早々聞かしてほしい。あなかしこ。」という意味になります。

日蓮上人の獅子吼の説法銅像は昭和三十九年九月、信者一同の力で相師堂境内に建設されました。
我日本の柱とならむ
我日本の眼目とならむ
我日本の大船とならむ
上人の三大誓願を象徴しています。



愛宕神社境内、はるかに佐渡を見わたす小高い丘に、一基の歌碑が建っております。この歌碑が寺泊の遊女初君の歌碑です。

伏見天皇の御代、永仁六年（一一九八）時の権中納言藤原為兼は、幕府の執権北条貞時に陰謀の疑いありとして捕えられ、はるばる佐渡へ遠流の身となりました。

寺泊の港に風待ちのため滞在すること二ヶ月余、この間為兼卿のつれづれを慰めるためにお仕えしたのが、当時才色兼備をうたわれた遊女初君でした。

佐渡へ出発の朝、為兼卿は尽きぬ名残りを惜しみつつ、愛する初君に自分の気持ちを

逢うことを またいつかはと 木綿たすき かけしちかひを 神にまかせて
と詠んだ一首を贈りました。涙をこらえつつ、じつとこの歌を手にしていた初君は、やがてハラハラと涙を流しつつ

もの思い こしじの浦の白波も たちかえるならひ ありとこそきけ

と一首を詠んでおかえしたのです。初君の歌の意は、寄せては返す日本海の白波の如く、いつの日にか必ず貴方は許されて帰ってくることでしょう。私は、心からその日の来るのを肝に銘じて待っていますと、彼女の切々たる心情を詠んだものです。



こうして、涙ながらに佐渡へ渡られた為兼卿は、五年後に許されて都へ帰り、まもなく大納言に昇進し、伏見院の命により正和二年（一二三三）に勅撰の『玉葉和歌集』を完成しました。そして、初君のこの和歌を選び、「為兼佐渡国へまかり侍りし時、越後国てらどまりと申す所にておくり侍りし」と記し「遊女初君」として収録したものです。

一衣一鉢

諸国放浪を終えた良寛が、飄然と越後に帰ってきたときの最初の宿が寺泊郷本の空庵でした。良寛は、帰路出雲崎を通りましたが、生家には立ち寄りませんでした。弟由之が家を継ぎ、家を守っていたにしても「橘屋」（良寛の生家、地主木村家の屋号）はずでに家運が傾いていたのです。そのときの歌に、

来てみれば

わがふるさととは荒れにけり

にわもまがきも

落ち葉のみして

密蔵院



郷本空庵

と詠んでいます。

良寛は、実家の前を通りすぎ、海から吹きつける潮風をうけながら郷本の空庵へと、海沿いの道を歩いたのです。

郷本の空庵は、破れ板にかこまれた無人の小屋でした。良寛はここで寝起きしましたが、出雲崎の弟夫婦が迎えに来ても行こうとせず、衣服や食事を置いていっても、必要なだけをもたらってあとは返したそうです。そして半年後、いづこともなく行方を絶てしまったのです。

再び放浪の旅から寺泊へ帰ってきたのは、四十五歳頃のときで、照明寺境内の密蔵院に住まわれました。

良寛は、この密蔵院でのくらしが気に入ったとみえ、また、近くに嫁いでいる妹むらがいるためか、生涯三度ほどここでくらししました。

いつの世も、人の生きる姿には、陽のあたるところとあたらないところがあるようです。寺泊には、かつて遊郭があり、飯盛女をかかえる家が多くありました。遊女が、托鉢中の良寛を呼びとめて、おはじき遊びに興じたという話があります。これを弟由之が歌で忠告し、良寛も歌で返すというふうには、兄と弟のおもしろいやとりがあったのですが、同じ世捨人だったにしても、遊女とあそぶことに世間体を感じた弟と、そんなことは超越して、楽しく遊女とおはじきをした兄との違いがのぞかれます。

大森子陽の墓

寺泊駅近くの当新田の万福寺という寺に、良寛が少年時代に学んだ狭川塾の師、大森子陽の墓があります。

三十九歳で郷本の空庵に帰ってきた良寛は、何よりも先に子陽の墓に詣でています。その大森家墓地に良寛の詩碑が建てられています。「子陽先生墓」の詩は良寛の心情が切々と伝わってくるのです。その詩をわかりやすく説明すると次のようになります。

「あれはた、岡のかたわらの古びた墓には、年々うれいげな草がはびこっています。水をかかた、まわりを掃く人もなく、時に草刈りや木樵りの通る姿を見るだけです。

思えばむかし子供のころ、狭川の塾に通った。それがいったんお別れしてから、先生も私も消息を絶ててしまった。いま、ようよう帰ってきて訪ねたものの、先生は逝去されてしまっている。どのようにして、先生の霊とおはなしすればいいのだろう。ひとすくいの水を墓石にそいで、おとむらいのことばを申しあげてみる。陽は見ているうちに西へ沈み、山野は松風の音がするばかり墓石の前を行きつ戻りつ、去りがたい気持でいると、とめどなく涙が出てきて衣の裾をしめらせる。」

人生の恩師として子陽を偲ぶ良寛の澄んだ気持があふれているのです。良寛は帰郷を機に、ひたすら詩作三昧にふけりそして人に乞われるままに自由闊達で滋味あふれる書を残して、悠然と放浪を続けました。寺泊には、良寛の息づかいが聞こえてくるほど、良寛が残した詩歌や書が多くあります。また寺泊を含め、旧分水町、旧和島村、出雲崎町、旧与板町など近郷の町々にたくさん足跡を残しています。

近年「良寛ブーム」につれ、それらの遺墨や史跡なども地元「良寛会」の手により研究整備され、良寛に開する書籍も多く刊行されています。

良寛のふるさとであるそれぞれの町や村は今、都市化を急速にいそぎはじめています。しかし時世がいかにも様変わりしても、良寛の歩いた道には一木一草が往時を語りかけ、時間と空間を超えて、ここ寺泊の地を訪れる人々の胸に、良寛さまはいつまでも生き続けるのです。

佐藤継信・忠信追福の塔

田福寺境内に七輪の石塔があります。これは、源義経に従って平家討伐に従軍したわが子を慕って、寺泊まで訪れてきた音羽の御前が二基の塔を建て、わが子討死の冥福を祈ったといわれています。



密蔵院 歌碑

順動丸と寺泊沖海戦

慶応四年（一八六八）五月二十四日、寺泊港外で幕府軍と薩長軍の海戦があり突然とどろく艦砲射撃に町の人々は戦々恐々として磯を走り、山に逃げる一騒動があったと歴史は伝えています。

薩長二艦は、砲箱からの砲弾輸送の任を終え寺泊港に碇泊中の順動丸を砲撃しました。虚を突かれた順動丸は、激しく応戦しながら佐渡沖へ脱走を試みましたが、薩州軍乾行丸、長州軍丁卯丸両艦の挟撃で中央突破ができず、やむなく陸地の方へ転進しました。薩長艦の砲弾は執拗に順動丸を追い、幕府軍の駐屯する陸地のめばしい軍事目標にも炸裂しました。

勝敗は既に明白で、会津藩士の一、柳幾馬船長は全員脱出後の自爆自沈を決意して、敵の弾雨を避けながら海岸に近づき、一瞬速力を落として故意に座礁させました。

幸い乗組員に負傷者もなく、自爆装置をセットした後全員無事上陸して弥彦方面へ遁走したその夜、寺泊の地と海を震駭させて順動丸の鉄片は空に舞い、壮烈な最期をとげたのでした。

順動丸は、排水量四〇五トン、蒸気機関を有し、速力を誇る鋼鉄製の外輪船で、英国製の新鋭艦でした。寺泊には、この海戦のとき発射された砲弾がいくつか残されています。

鉄の新鋭艦も、木造の敵艦に比べて装備に劣る輸送船であり、かつ油断が招いた悲劇なのでしょうか。

八百比丘尼伝説

全国に点在する八百比丘尼伝説のなかで、寺泊野積浜の旧家高津家の前庭には、八百比丘尼ゆかりの老松が今も大切に保護されています。

西生寺

海雲山西生寺は、日本海を見下ろす山の中腹に建っており、古くより北陸随一の霊場として崇められてきました。親鸞上人や松尾芭蕉も参詣したと伝えられています。

また、日本最古のミイラとしても名高い弘智法印は、高野山で修行を積んだあと、貞治二年（一三六三）に西生寺の草庵で即身仏になられました。今も参詣者は跡を絶ちません。



西生寺

みなと寺泊の民謡

塩たき節

へなじよな塩たきでも

こしろうて出せば

枝たれ小柳ちごぎくら

へ女波男波を

くみわければ

今日の月こそ桶にあり

越後追分

へろもかかも波にとられて

身は棄て小船

何処へとりつく島もない

(合の手)

よくも染めたよ 船頭さんの厚子

腰には大船 裾に波

背には錨の紋どころ

質に入れても流りやせぬ

寺泊おけさ

へあつしなわ帯 腰には矢立

伝馬通いがやめらりよか

へ佐渡へ八里のさざ波越えて

鐘が聞こゆる寺泊

(合の手)

へ一七島田白歯の娘

さらし手拭 ふわりとかぶり

寺の大門 すたばた行けば

寺の和尚は それ見ておりて

答えられぬ

られないけれど 和尚の身なら

呼ぶに呼ばれず 手にや招かれず

崖の桜で 見るばかり

へ朝な夕なの有信心も

一つ身のため 主のため